

NEWSLETTER

THE JAPANESE SOCIETY FOR
PARAPSYCHOLOGY

January 1981

NO. 30

海外トピックス

「以耳認字」つまり耳で文字を読む少年達の話が最近巷の話題をにぎりしている。去る1月26日午後8時より東京オーディオ・キャンキルタミステリーショックで放映された彼等の実演は大変興味深いものであった。当日は大谷先生がゲストとして出席され、これに対し模倣かつ適切なコメントを加えられた。次に2,3印象的な場面を御紹介しよう。辛瑞喜といふ16才の少女は人体内部が透視出来、食道に異常のある中年男性の心臓部位を図示する。後で医師がこしたレンズ写真は全くその形を通りであった。彼女は兎にもバッグの中に入れてある身分証明書を読みことが出来るなど透視能力をもつてゐる。董長江といふ4才の男の子は実験者が提出した数学の問題と彼の父親が頭の上に手をかざしていゝ時に隠して書き表すことが出来た。例えば $2 - 5 = -3$, $\sqrt{3} = 1.732$ など勿論、本人は通常の状態では全く理解不可能な数式をすらすら書いてしまう場面はまさに驚異的であった。まだこれ以外にも殊節間のテレパシーテスト、地下に埋蔵された下水管をあひ少年などvarietyに富む場面が次々にあらわれ良しつかせぬ程であった。此等の実験は画面で見る限り、感覚的、推論的な手がかりを十分に排除した本格的なものであるとはいふがなかなかそれとも我々にあり真実の所在を示すものである。とくに此等の少年達に対する一般民眾の素朴にはあるが好意にみちた想、ほのい複雑な勘察、オーソドックスな自然科学家達が偏見なしに科学の対象として取組もうとしている真剣な態度には心打たれるものがある。例えは原子物理学者の王澤昌、物理学者の趙忠饒は心が客觀的の存在する事実であることを認め、生物物理学者の莫峰章は自分の実験を通じて信念を固めることを生業、生物電流を測定することなどを、し、温度に対する能力の変化を研究していふところである。我々は此等の少年達に対し、自然科学を中心とする研究者達がConfirmativeを実験を行は、その結果が学習から正式に発表される日を大いに期待するものである。

学会ニュース

第149回月例研究会

1981年1月18日(日) 10.00~16.00

場所 学士会館本館 出席者8名。この間正午から約1時間新年の初観合を兼ねて食会が行われました。第13回大会につづいての反省が行われ、もとより長い準備期間が必要とするなど、抄録も大会前に全員にわたっておこなが望ましいなど、13回有益な意見が述べられました。時期につづけて12月の此地は他学会がありながら、適切であると思ふ一覧を見ました。また、研究討論会の「偶然のPSI 現象調査の方法」は大変参考で示唆的有益な意見が述べられました。元々と小まこと今後、現在の日本における偶然のPSI 現象の情報を蒐集し、調査、審査の方法を考慮するため行動を起こそうとするなりました。つづけてオランダの超能力者クロワゼットの有名な椅子テストについてのテンハエフの研究を批判してOdebenに予論文が大谷先生により紹介され、討論が行なわれました。

お知らせ

第150回月例研究会

下記要領で2月例会を開催致します。

時 1981年2月15日(日) 10.00~16.00

協議 1. 偶然のPSI 現象の調査について

研究 1. PK 装置の改良について

紹介

Comparison of Report of the "Denver" Chair Test: A critical Examination of the Methods of W. H.C. Tenhaeff

by Riet Hein Hoebens

大谷 宗司

Gerard Croiset は世界で最も優秀な Sensitive とされ、"Dutchman with the X-ray Mind"とも異名されてゐる。彼は世界中の警察に協力し成功し、彼のすぐれた予知能力は科学的にも吟味されたと広く信用されてゐる。しかし、彼の能力の真偽に対する論争も続りだしてゐる。警察の权威者の中にも批判的な者が居り、彼の客観的を示したといわれる唯一の実験的試みは、*成功^{*}

* Chair test に対する批判が行われてゐる。本論文は、Croiset が被験者となり最も成功したとされる遠距離 chair test に対する批判を試みたものである。

Croiset の能力については研究はオランダの超心理学者 Dr. W. H.C. Tenhaeff によって長年行われて来た。Dr. Tenhaeff は 1953 年より最近まで Parapsychology Institute, Univ. of Utrecht の director である、ヨーロッパにおける超心理学の重鎮である。Tenhaeff は 1947 年以来 Croiset について chair test を多数回行ってゐる。ここに批判しようとするのは、1969 年 1 月、オランダと米国との間に行われた遠距離 chair test であり、オランダの研究者は Tenhaeff、米国側は Dr. Eisenbud であった。

1 月 6 日、Croiset は 2 シリーズの Chair tests を行った。これは同月 23 日夕刻、米国 Denver, Colorado で開かれた集会に参加した人々がこの特定の椅子に坐る人にについての情報を求め当てようとする試みであった。結果は Tenhaeff により雑誌や単行本に、また Eisenbud によって Journal of ASPR に報告されてゐる。本論文はこの両者の報告を比較検討し、この実験の条件の不適切さ及び報告の食い違ひを指摘しようとするものである。以下箇条書きで両報告の違いについて述べる。

1. Croiset が target person に述べた陳述の item の数

target person は 2 人選ばれた。これは、予め予定した数の椅子に番号をふり、当日集った人に夫々番号札を手渡し、random を仕立て選ばれた椅子と同じ番号を持った人を選ぶものである。Croiset はこれらの人について予め彼等がどんな特徴をもつて居るかを述べたのである。

その陳述の数は、Tenhaeff は 8 と全部で 21 というが Eisenbud の報告ではそれよりも 9 つ多い。しかもこれらは適中していなかった。

2. target person の Croiset の陳述に対する評価に変更があった。

参加者には全員 Croiset の陳述が手元られ、それを自分自身に当てはまるか否か自己決定することを依頼された。またそれを変更することも許されていた。しかし target person は評価を大きく変えた。第 1 の人は結果 16 から 31 に、第 2 の人は 15 から 35 へ増加した。これは彼等が、target person である可能性を知り（当日の終りにはそれが明らかされた。）適中されることに強い motivation を持つためではないか。

3. 64 頁

Croiset は target Person は最近読んだ本の 64 頁に関して強いある感情を経験したことがあると言った。これに対し target person は最近否定したが常に経験し適中とした。これも motivation に関するものではないが。またこの様な事柄は筆者自身について考えてみても当てはまることがある。T 審に反対すれば誰も当はまるものが見つかるとはないか。また Tenhaeff の報告で target person の述べたことが Croiset の陳述で"あるとすりかねた"と思われる所がある。

4. 押しつけたのかふっかけたのか

Croiset は target person は鼻をガラスに強く押しつけたことがあると言った。target

Personは強くぶつけたことがあると返答し途中でしゃべった。しかし押しつけるとぶつけたとは異なりびはなかが。

5. 足指の傷

Croisetはtarget personは足の親指に傷跡があると言っているが、この人は足指の爪に異常があった。そのため靴の先に金を詰めて保護していったが、Tenhaeffの報告ではCroisetがこの点についても言及したと述べている。

6. 靴下の穴

target personは緑色の靴下で左足の穴がありていいとCroisetは言った。target personは最初このことを否定し、あとでもう一度いたと訂正していい。

7. 誰か target Person なのが?

この実験でtarget PersonはMrs. OlingerとMr. Tuckの2人であると言われているが、実際にその決定もあり手口を裏がある。それは、番号札かはじめ予定したより1枚多く作られてしまい、これはTenhaeffが指定の仕方が適切ひながら、そのためであるが、そのため、どのれる実験の場合に除くがんつりでは、よりした根拠もなしにその操作をしてしまつた。そのためこの2人がtarget Personであるといふことの根拠も明瞭ではない。

この様に2人の報告者の報告の間違い、更に実験条件に欠点をもつていい実験であった。Eisenbudはこれは言葉の困難さが原因していいのかもしれないと言っているが、筆者はCroisetについての報告は、これまでほとんどTenhaeffのものが唯一であるが、今回は他の独立の報告者が別の発表をしていいと述べていい。ただし重要なケースであると述べ最近にDr. Zorabの「Tenhaeffの金山には少くとも少量の卑金属が含まれる」という言葉が重みを加えると感ずると述べていい。

Mr. Hoebensはオランダにおける有名新聞の記者である。大谷は昨年第23回P.A. Conventionの帰りにアムステルダムで彼と会い、Croisetが日本での実演に関して意見を交換した。

Abstract

*Research in Parapsychology 1979
Abstracts and Papers from the 22nd Annual Convention of the P.A., 1979*

第22回P.A. 年次大会は1979年8月15-18日の間St. Mary's College, Moraga, Californiaにおいて行われた。こり大会はJohn F. Kennedy Univ.の支援を得て行われた260名の出席者があった。17の論文、22の小論文が発表され、3つのシンポジウム、3つの円卓会議が開かれた。発表題は下記の様である。

Symposia

Psi and Scientific Method: Views from Diverse Perspectives

On the Genesis of Research Hypotheses in Parapsychology. by R. A. White

Science and Parapsychology: An Ideological Revolution. by M. Winkelman

Using the Scientific Method to Probe the Limits of Science. by J. Beloff.

Psi, Methodology and the Social Context. by E. R. Gruber.

Methedological Perspectives on Psi Research

Paranormal Group Dynamics. by Crosso.

Using Altered States of Consciousness to Facilitate or Study Psi. by C. T. Tart.

Imagery, Resonance and Psychic Healing. by R. G. Locke.

Are we Shamans or Scientists.
by R. G. Stanford.

Are Psi Occurrences Random?
by T. N. E. Greville

A Case of Haunting. by W. G. Roll.
(以下の論文は次号NO.31にて予定です。)